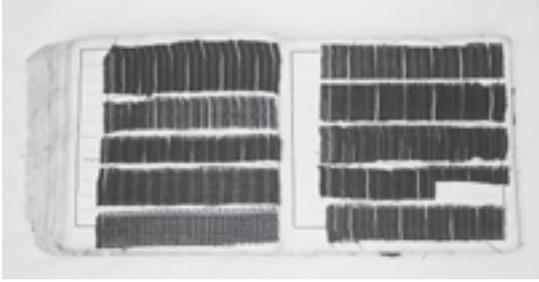


### 美濃縞のおこり



美濃縞見本帳

江戸時代の中ごろ、明和年間（一七六四～一七七二）京都西陣から棧留縞織りの技術が伝わり、これより二十年後の天明年間（一七八一～一七八九）には、京都仏光寺通り西の洞院の火災により、そこに居住していた職工が、美濃に移住して菅大臣縞（寛大寺縞ともいう）を伝えました。この二種類の縞木綿のうち棧留縞は、明和から天保（一八三〇～一八四四）にかけて約六十年間、この地方を代表する産物でした。その証として文政

十二年（一八二九）、加賀金沢の商人の記したものの中に「尾張と美濃の棧留縞は諸国流行の品で、加賀藩領内への売捌量も莫大に上る」と述べていること

からも理解できます。

さらに文政（一八一八）ころから結城縞が織出され、天保末年から次第に従来の棧留縞に変わって、この地方の主製品となりました。棧留縞は木綿であるのに対し、結城縞は絹綿交織で、細口の木綿に絹糸を混ぜて九百～千の箄で織られ、縞柄は三筋立・二崩し・三崩し・四崩し・刷毛目縞などがありました。製織上からも棧留縞より高い技術が必要とされ、製品は高級衣料で、農家の自給用の日常衣料ではなかつたので都市町人層を顧客とし、遠隔地に売捌かなければなりませんでした。

こうして伝えられた結城縞は、文政・天保期には主として美濃の芝原・北方・加納の間屋を経て売り出されたので「美濃結城」と呼ばれ、文政ころから明治初年に至るまでこの地方の代表的な縞木綿となりました。

以上述べてきた縞木綿が広く伝わったことについて、これを表示



すると次のようになります。製織技術の移植は、ほぼ享保から天明にかけての間に、幅広く展開したことが認められます。

これらの縞木綿は、一般的には、「美濃縞」という名称で一括されて呼ばれていました。これは、加納・竹ヶ鼻・笠松周辺の美濃地方が主産地であつたためと思われる。大正末期から昭和の初期に至り、経済変動や織物業界の変遷もあり、一時衰退の時代もありましたが、今日までの美濃縞織りの歴史は、この地域の発展のために輝かしい歴史の一ページを飾つたものといえます。

資料館では、機織り機や美濃縞見本帳などで織物の歴史を紹介しています。

### 行政相談 人権相談

行政相談、人権相談は自宅でも応じています。

いずれの相談も秘密は固く守られますのでお気軽にご相談ください。

行政相談	行政相談委員	岩田 修	宮川町57	☎387・3718
人権相談	人権擁護委員	齋藤好子	中川町20	☎387・0812
		保母勝壽	弥生町30	☎387・2782
		後藤 稔	北及1183	☎388・1495
		杉原貴子	中野256	☎388・1496